

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例
-------	-------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

山口県山陽小野田市

○学校名

山陽小野田市立須恵小学校

○学校のURL

<http://www.edu.cty-so.jp/sue-es/index.html>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年3学級 【特別支援学級】1学級 【合計】19学級

○児童生徒数

【全児童数】476人（平成24年11月30日現在）
（内訳：1年生72人、2年生71人、3年生78人、4年生83人、5年生86人、6年生86人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

自ら考え、正しく判断し、心豊かに、たくましく生きる子どもの育成
（めざす児童像）

○進んで学ぶ子（学ぶ力・創る力）

○明るくたくましい子（生き抜く力・燃える心）

○なかよく助け合う子（広い心・温かい心）

【研究主題】 豊かなかかわり合いを通して、共に学び合う人権教育の推進

【研究主題設定の理由】

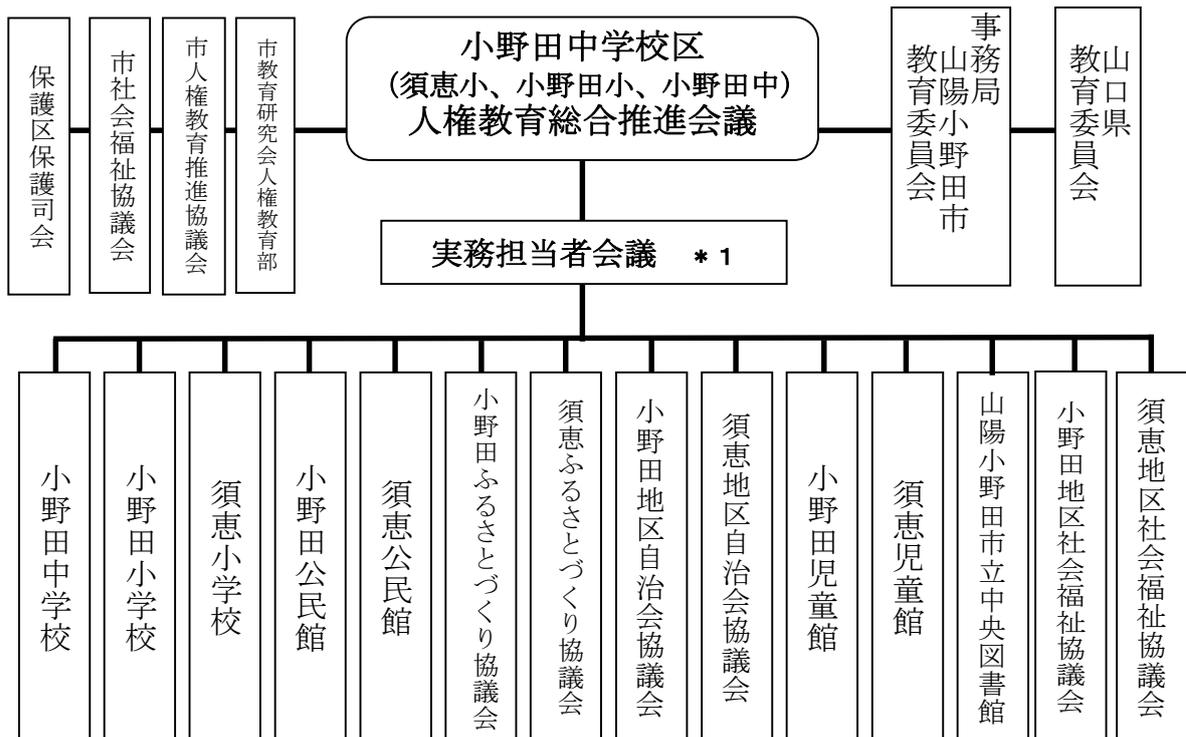
山陽小野田市は、新市発足後の平成20年に作成した「第一次山陽小野田市総合計画」の中で『市民が主役のまちづくり』を掲げ、人権尊重のまちづくり、男女共同参画社会の実現を図るため、学校・家庭・地域・職場など様々な場を通じて人権教育・人権啓発を推進する体制の整備を図っている。

山陽小野田市立須恵小学校においても、一人ひとりが基本的人権の意義や人権尊重の理念について理解を深め、日常生活において人権の大切さに気付く豊かな感性を育むことや、一人ひとりの人格を認め合い、互いに個性を尊重することによって、人権が尊重された学校づくりを進めている。そのためには、子どもたち、教職員や保護者、地域社会の人たち、それぞれが人権の主体者であるという認識のもと、豊かなかかわり合いを通して、基本的人権を尊重することの大切さを互いに学び合うことが必要であると考え、本研究主題を設定した。

○人権教育にかかる取組の全体概要

山陽小野田市立小野田中学校区にある須恵小学校は、小野田小学校、小野田中学校とともに、平成22年度から24年度までの3か年、文部科学省の「人権教育総合推進地域事業」の指定を受けて、研究を推進してきた。小野田中学校区人権教育総合推進会議を中心として研究の方針と取組内容を検討し、学校間及び学校と地域における関係機関との連携に重点を置いて、人権教育を推進していくことにした。

(1) 推進体制全体の概要



* 1…研究推進校（須恵小、小野田小、小野田中）の研修主任又は人権教育主任で構成されており、研究の具体的な取組を提案し、推進していく役割がある。

(2) 取組の重点項目

◇地域・保護者等との連携を図る教育活動の充実

ア あいさつ運動

- 児童会や生徒会が中心となった主体的な取組
- 教職員・保護者・地域等の合同の取組

イ 学校支援ボランティア、ゲストティーチャーの活用

- 学習支援や環境整備のボランティア等による児童生徒とのかかわり合い
- 地域住民のゲストティーチャーによる学習活動の取組
- 児童生徒の登下校時の見守り活動

ウ 学校・家庭・地域が一体となった人権教育講演会等の実施

- 学校における人権教育講演会に地域住民も参加できるような体制づくり
- 地域における人権教育研修会への教員や保護者の参加

- 小野田地区と須恵地区合同の人権教育講演会等の実施
- エ 学校便りや人権便り、ホームページ等の広報の充実
 - 児童生徒の頑張りや様々な人々とのかかわりの様子を知らせる内容の工夫
 - アンケートや学校評価の結果を踏まえた、地域と一体となった学校づくり
 - 学校内外の人権に関する話題を取り上げた内容の充実

◇小中連携事業

- ア 中1ギャップ解消に向けた授業づくりや生徒指導の展開
 - 3校（須恵小、小野田小、小野田中）実務担当者会議の内容の充実
 - 3校教職員合同による人権教育研修会の実施
 - 3校合同の生徒指導や教育相談担当等の連携会議の実施

イ 小・中学校教員による交流授業

- 中学校教員による小学校への乗り入れ授業
- 小学校教員による中学校への乗り入れ授業
- 3校の教職員相互の授業参観

◇学び合いを重視した授業づくり等

- ア 互いの人格を尊重し、認め合う人間関係づくり
 - 互いに何でも話し合うことのできる温かい支持的な集団づくり
 - 一人ひとりを大切にし、児童生徒のよさを伸ばす授業づくり
 - 異年齢集団や地域の人等とのかかわり合いを通した学び合い
- イ 実践的なコミュニケーション能力の育成
 - 思考力・判断力・表現力を育む活用型授業への取組
 - ペア学習やグループ学習等の小集団でのかかわり合いのある授業づくり
 - あらゆる機会をとらえた児童生徒の言語活動を取り入れた学習の場の設定

3. 特色ある実践事例の内容

◆学校支援ボランティアの取組

学校・家庭・地域が相互に連携・協力し、地域ぐるみで子どもたちの学びを支援しようと、保護者や地域の方が自主的に「学校支援ボランティア」として登録し、「読み語りボランティア」や「学習支援ボランティア」などの取組を実践している。

(1) 読み語りボランティア

毎週金曜日の朝、8時15分から8時30分までの15分間で、1年生から6年生までの全学級で絵本の読み語りを行っている。読み語りをするのは「読み語りボランティア」で、保護者や元保護者を中心に22人で構成されている。各学級を1人から2人が担当し、それぞれの学年に応じた絵本を準備して読み語りを行っている。



ボランティアの方の表情豊かで感情を込めた読み語りを、子どもたちは絵本に食い入るようにして一生懸命に聞いている。子どもたちは、毎週の読み語りの時間をとても楽しみにしており、心豊かになれる有意義な時間を過ごしている。

(2) 学習支援ボランティア



毎学期、2週間にわたって1・2年生を対象として、地域の方6人が算数科の学習支援をしている。さらに、低学年の算数科の授業の中でも、ボランティアが個別指導を実施しているので、子どもの基礎学力の定着が十分に図られている。子どもたちは、わからなくなっているところを個別に時間をかけて丁寧に教えてもらえるので、理解が深まるなどの成果が上がっている。

学校支援ボランティアの方が、学校で子どもたちと接することで、子どもたちと地域の人たちが温かい人間関係を築くことができている。また、地域で子どもたちへ気軽に声をかけてもらうことで、子どもたちは安心して地域で過ごすことができている。

学校内でのボランティア以外にも、様々なかたちで保護者や地域の人たちによるボランティア活動が進められている。それらの例を、以下に紹介する。

(3) あいさつ運動

毎月15日、子どもたちの通学路や学校周辺にあいさつの輪が広がる。この光景は、「地域力で子どもを育てる」をモットーに、「ふるさとづくり推進協議会」「須恵地区社会福祉協議会」の人たちが中心になって実施している「あいさつ運動」である。

地域の人たちから「おはようございます」「元気ですか」「いってらっしゃい」等のたくさんの温かい言葉がけをしてもらい、児童のあいさつの習慣や元気・活力の向上の源となっている。

さらに、毎月1日、15日には、児童の登校の様子を見守る交通指導がある。これは、育友会生活指導部を中心に行われている活動で、当番日を決めて全校区内で、保護者によって行われている。安全指導の中であいさつを交わすことにより、地域の子ども、地域の保護者としての意識が高まっている。



(4) 子ども110番・見守り隊

須恵小学校区内では、子どもたちが登下校中の事故などの相談や、緊急避難の対応をしてくれる「子ども110番」への登録が26か所あり、下校見守りボランティアへは102人が登録されており、児童の登下校時の安全確保のために、多くの地域の人たちが尽力されている。



朝の登校時には、児童の安全を見守って、児童も元気なあいさつを通して感謝の気持ちを伝えている。見守り隊の方の中には、早朝より集団登校の集合場所で児童を待たれ、一緒に学校近く、または、学校まで見守っていただいている方々もいる。地域のコミュニティの大切さを、実践を通して児童に示してもらっている。

登校班の班長より

いつも笑顔で私たちを見守っていただき、ありがとうございます。朝からみんなが元気になれてうれしいです。登校中は、並び方やあいさつなど優しく指導してくださり、感謝しています。これからも楽しく安全に登校できるように、よろしくお願いします。

人と人のかかわり合いがますます求められている中で、「学校支援ボランティア」として地域の方や保護者の方が積極的に児童にかかわっていく活動は、子どもたちに感謝や思いやりの気持ちを育むとともに、子どもたちの社会性を培っていく原動力となっている。

4. 実践事例の実績、実施による効果

児童生徒の変容をみていくために、3校の実務担当者を中心に協議を重ね、平成22年度に「自分をふりかえるアンケート」の質問項目（小中共通、24項目）を作成した。この目的は、3校の児童生徒が自分や他者を大切にしながら、いきいきと生活することができるかどうかの現状と課題を探ることである。

各年度（年2回）にアンケート調査を実施し、集計結果から取組の評価をして、人権教育の推進に生かしている。調査対象は、須恵小・小野田小の第3～6学年全児童、小野田中全生徒である。

自分をふりかえるアンケート

() 学校 () 年 () 組 () 番 氏名【 】

※次の質問について、あなたにあてはまるものを、1～4から選んでください。

- 1 まったくあてはまらない 2 どちらかといえばあてはまらない
3 どちらかといえばあてはまる 4 よくあてはまる

番号	質 問	
1	自分のことが好きだ。	省 略
2	自分にはよいところがある。	
3	自分の将来の夢や目標がある。	
4	自分には悩みや相談を聞いてくれる人がいる。	
5	学校生活が楽しい。	
6	学校の授業で自分の考えや意見を進んで話している。	
7	学校の授業で友だちの意見をしっかり聞いている。	
8	友だちに自分のがんばったことを認められている。	
9	友だちに傷つける言葉を使わないで話している。	
10	友だちが困っているときやさしくしたり助けたりしている。	
11	友だちと協力して学校生活をよりよくしようとしている。	
12	学校で進んであいさつをしている。	
13	学校の掃除を一生けんめいに取り組んでいる。	
14	学校のきまりや約束を守っている。	
15	いじめはどんな理由があってもいけないと思う。	
16	いじめを、見て見ぬふりをしないようにしている。	
17	先生の言うことをしっかり聞いている。	
18	先生に自分のがんばったことを認められている。	
19	家の人に進んであいさつをしている。	
20	家で、進んで手伝いをしている。	
21	家の人に自分のがんばったことを認められている。	
22	地いきの人に会ったとき、進んであいさつをしている。	
23	地いきの行事や活動に進んで参加している。	
24	人のために役に立ちたいと思う。	

「自分をふりかえるアンケート」の平成22年度第1回（12月実施）と平成24年度第1回（5月実施）の結果から、以下のような変容が見られた。

① 自尊感情や自己有用感について

番号	質問（表中の数値は、4段階自己評価の平均値）	H22年 12月	増 減	H24年 5月
1	自分のことが好きだ。	2.5	↑	2.8
2	自分にはよいところがある。	2.8	↑	3.0
3	自分の将来の夢や目標がある。	3.4	↑	3.6
24	人のために役に立ちたいと思う。	3.4	↑	3.6

質問1の「自分のことが好きだ」と質問2の「自分にはよいところがある」といった自尊感情や自己有用感につながる項目では、1年次より結果がよくなってきた。様々なかかわり合いを通して、他の人から認められたり、誉められたりして、子どもたちの個性を伸ばしていこうとする取組の成果と言える。

質問3の「自分の将来の夢や目標がある」や質問24の「人のために役に立ちたいと思う」の項目は、1年次よりさらに高い数値となり、将来の自分自身に対する思いや、何らかの役に立ちたいという肯定的な思いは強い。これは、地域や関係機関との連携によって、自分や自分たちを支援してくれる人たちへの感謝の気持ちが高まってきているからと考えられる。それらは、清掃や奉仕活動などへの取組にも表れている。

② あいさつについて

番号	質問（表中の数値は、4段階自己評価の平均値）	H22年 12月	増 減	H24年 5月
12	学校で進んであいさつをしている。	3.2	↑	3.5
19	家の人に進んであいさつをしている。	3.2	↑	3.4
22	地いきの人に出会ったとき、進んであいさつをしている。	3.3	↑	3.5

質問12の「学校で進んであいさつをしている」は、1年次より平均値が0.3増となっている。教職員の日々のあいさつ指導や児童会・生徒会を中心とした主体的な取組、保護者や地域住民のあいさつ運動への協力などの取組の成果である。

質問19の「家の人に進んであいさつをしている」や質問22の「地いきの人に出会ったとき、進んであいさつをしている」とも成果が表れ、あいさつ運動の推進や地域でのかかわりなど学校・家庭・地域との連携が一層深まってきていると言える。

5. 実践事例についての評価

【取組についての評価】

- 「自分をふりかえるアンケート」を作成するにあたり、目的や方法、質問項目等について、各学校内及び3校の実務担当者会議で協議を重ねたことは、3校の連携を進めていく上で大変意義深いものとなった。さらに、アンケート結果を分析し、取組の成果や課題を明確にしながら、3校の教職員が一体となって改善策を考え、実践に努めた結果、学校及地域の教育活動がより一層活性化された。
- 学校から発信される「自分をふりかえるアンケート」の結果や日々の児童生徒の学校での様子などから、課題意識を共有しながら、保護者も学校と一体となって子どもたちを育ていこうという意識を高めることができた。保護者の役割と責任を自覚しながら、家庭における人権教育を進めるために、学校と協力しながら、一緒に考えていこうとすることができるようになった。
- あいさつ運動を、保護者や地域のふるさとづくり協議会・自治会協議会等と協力して合同で実施したり、地域の人々による自主的な児童生徒の登下校時の見守り活動が行われたりするなど、地域全体で子どもを育ていこうとする気運が高まっており、人権が尊重された、安心・安全な地域づくりに貢献している。
- 総合的な学習の時間や生活科の授業、学校の行事等において、地域の人たちが学習や学校行事への支援、ゲストティーチャーなどに積極的に参画するようになり、児童とのかかわり合いから互いに学び合うことができた。地域全体で子どもたちを育む学校の支援体制が整ってきた。
- 児童が地域行事や地域清掃に参加し、地域の人たちとのかかわり合いを通して、地域の一員としての自覚や、地域を大切に思う気持ちを育てることができた。地域の人たちも、子どもたちと一緒に活動する機会が増えたことで、子どもたちを温かく見守り、支援していこうとする意識が高まった。

【今後の課題】

- 児童の自尊感情や自己有用感は、アンケート結果からも少しずつ高まってきていると言えるが、まだまだ低い児童もいる。自分のことを大切に思う気持ちは、相手を大切に思う気持ちへとつながるものである。児童一人ひとりが「自分は大切にされている」という気持ちをもてるように、そして、自分のよさを生かしていくことができるように、今後も学校・家庭・地域が連携して計画的に取り組んでいく必要がある。
- 学校と家庭・地域との連携がさらに強まるように、あいさつ運動の推進や学校での児童の様子を各種便り等で発信することを継続していくが必要である。

さらに、保護者や地域の人たちが互いにかかわり合い、学ぶことができるように、学校支援組織づくりに一層努め、「開かれた学校づくり」を進めていく必要がある。

- 学校支援ボランティアやゲストティーチャーなど、地域から学校に出向く体制は整ってきた一方で、地域へ児童や教職員が積極的に出向いて活動する機会が比較的少ない。地域の行事への参加やボランティア活動などに取り組むなど、地域と積極的にかかわりをもつことをさらに進めていきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

山陽小野田市立須恵小学校

「豊かなかかわり合い」を重視する取組を推進し、保護者や地域の人々が自主的に「学校支援ボランティア」として登録し、「読み語りボランティア」（絵本の読み聞かせ）など、保護者と地域の人々が積極的に児童に関わる環境を作り出している。また、総合的な学習の時間では「人にやさしく」を設定し、病院訪問、災害や貧困に苦しむ人へのプレゼント活動、地域の清掃活動など、ボランティア活動に関心を寄せ、「自分たちに何ができるだろうか」と、人権感覚を育む取組がなされている。加えて、地域行事や地域清掃など地域と主体的に関わることを通して、児童には地域の一員としての自覚や地域を大切にする気持ちを、地域の人々にも児童を温かく見守り支援する意識を醸成させる実践事例が紹介されている。